## vol.10　リディアンスケールの使い方について　～その 1～

では、vol.10、始めていきましょう。

今回から、各スケールの具体的な使い方に入っていきます。

この講座内で解説するのは、使用頻度の観点から、メジャー系のリディアンとミクソリディアン、マイナー系のドリアンとフリジアンです。

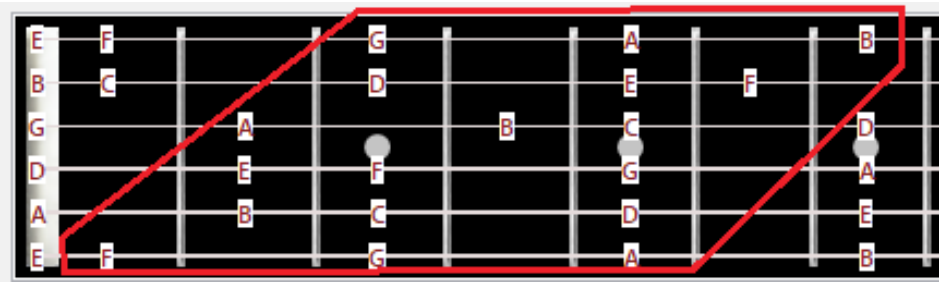
各スケールを対比させた、vol.07&08 辺りの内容と共に見ていくと、より理解が深まるでしょう。

と、言う事で、まずはトニックの設定ですが、F 音で行きましょう。なのでスケールとしてはF リディアンスケール、構成音はC アイオニアン(メジャー)スケールと同じですね。

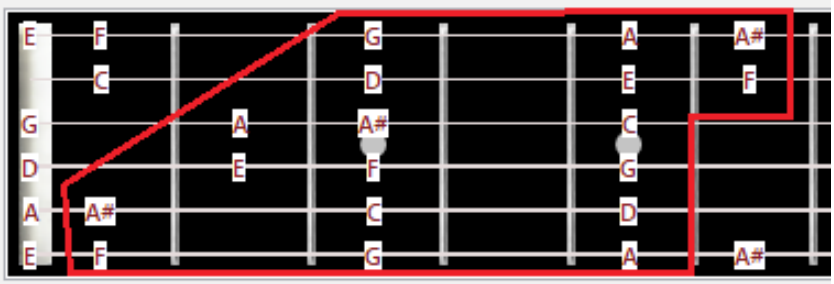
メジャー系のスケールは構造を見る時、アイオニアンと対比させるので、トニックをF 音に合わせた両スケールのポジションを比べてみます。

以前も同じような事をしましたが、改めてやってみましょう。

**F リディアンスケール、重要ポジション 1**




**F アイオニアンスケール、重要ポジション 1**




(※以下、図の A♯音は B ♭音に読みかえて下さい)

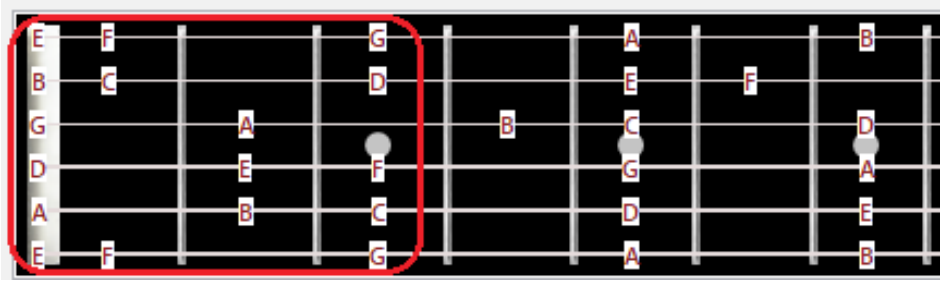
これは、6 弦のトニックを基準に見た、3 ノート・パー・ストリングのポジションですね。

文字通り、この様に弾く場合は、1 本の弦に対して 3 音ずつ弾いて行きます。

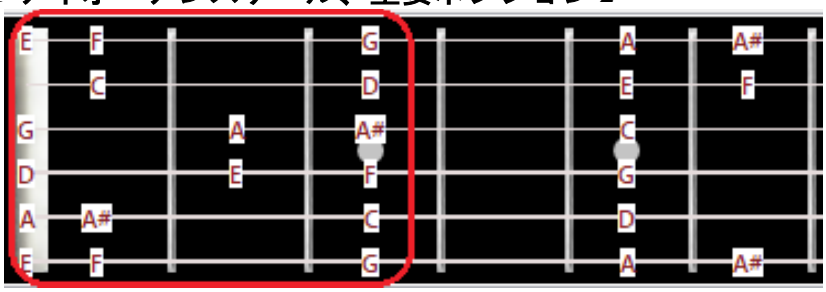
Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

練習としては、6 弦から 1 弦まで弾ききってしまう事も多いのですが、スケールの把握の観点からは、2 弦上のトニックの位置(この場合は 6 フレットの F 音)で一度止まった方がわかりやすいはずです。

**F リディアンスケール、重要ポジション 2**




**F アイオニアンスケール、重要ポジション 2**



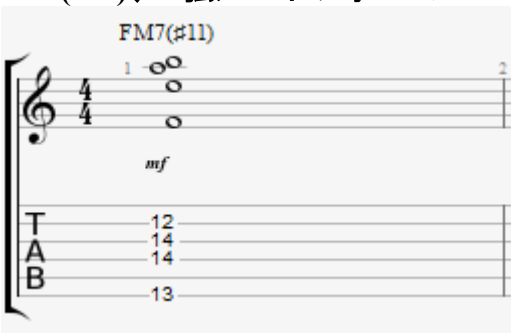

こちらは、もう過去に何度も弾いたポジションですね。リディアンとアイオニアンの違いである、4 度の位置を確認しておきましょう。

スケールポジションの見方は、これ以外にもいくらでも出すことが出来ますが、どこで弾くとしてもやる事自体は同じです。

上には 6 弦トニックのものしか載せていませんが、5 弦や 4 弦にトニックを置いて弾いてみたりと、色々なパターンで練習していきましょう。

続いて、リディアンの特性音ある♯11th(♯4th)を含んだ、XM7(♯11)のコードフォームを見ていきたいと思います。

**FM7(#11)、6 弦ルートフォーム**




Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved 

♯11th を加えた、代表的なフォームです。押さえ方は、6 弦から順に、中、薬、小、人指になります。

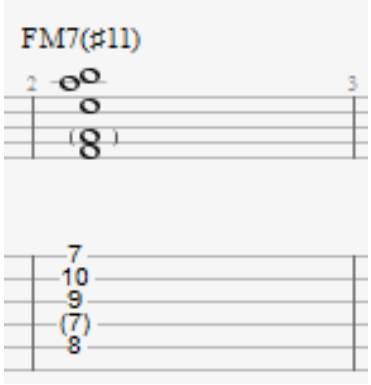
クリーン・トーンにコーラスなどを掛けて弾いてみると、それっぽさが出ます。

構成は下から root、M7th、M3rd、♯11th となり、P5th は omit(オミット、省略)されています。

ギターでは、一度に鳴らせる音に限度があるので、構成音が増えていくほど、何れかの音を省略することになりますね。

次に、上のフォームと同じ様な押さえ方を 5 弦ルートでやってみると、以下の様なフォームになります。

**FM7(#11)、5 弦ルートフォーム**

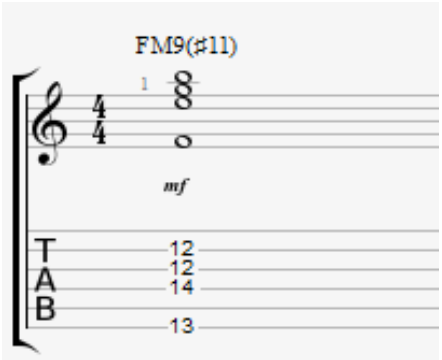



4 弦 7 フレットの M3rd は、鳴らしても鳴らさなくても、どちらでも構いません。

基本的な押さえ方は、先ほどの 6 弦トニックのものと同じですが、4 弦を鳴らす場合は人差し指で 7 フレットをセーハ、鳴らさない場合は人差し指で 1 弦だけを押さえても良いですが、3 弦までセーハするとフォームが安定するでしょう。

他にも、この XM7(♯11)に 9th を加えた XM9(♯11)も使うことが出来ます。

**FM9(#11)、6 弦ルートフォーム**

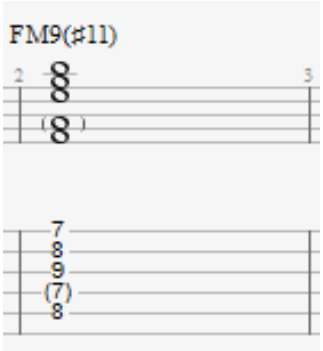



Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved 

このフォームの場合、3 度(M3rd)が抜けて、4 度(♯11th)と距離が近い音が減るので、こちらの方が、安定して聴こえるかもしれません。

で、これと同じ様な事を 5 弦ルートでやるとこんな感じになります。

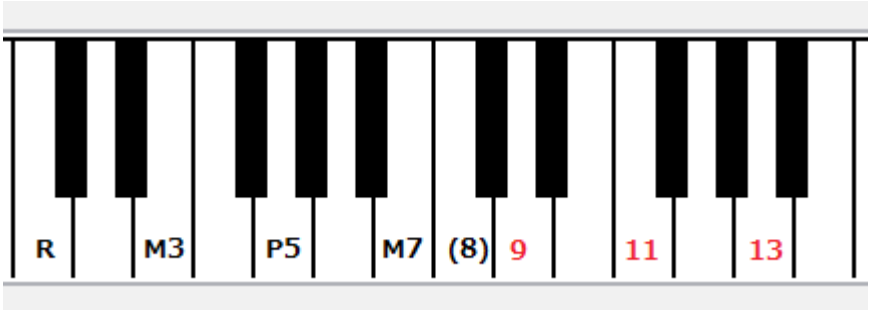
**FM9(#11)、5 弦ルートフォーム**




こちらもまた、4 弦を鳴らすかどうかは自由です。

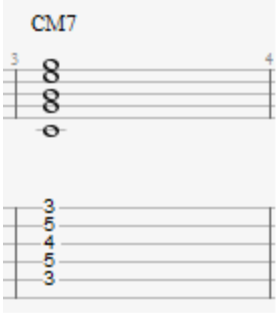
さて、テンションについてなのですが、本来、ピアノの様な楽器であれば、ルートからスタートして、1、3、5、7 度と鍵盤を押さえてから、次のオクターブ上の位置にテンションを置けば実直にコードが鳴らせますね。

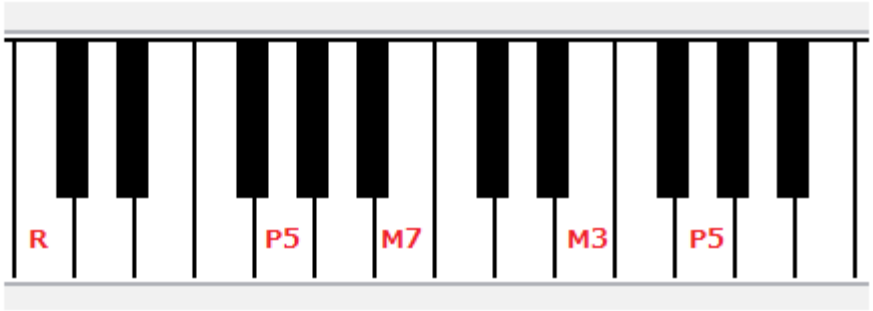
※C 音をルートに見た場合の一例




ですが、ギターでは楽器の構造上、必ずしもそういうわけにはいかず、構成音の配置が順当に下から積みあがっていない場合があります。

例えば、5 弦ルートの CM7 の場合、以下の代表的なフォームで押さえると、ピアノで見るとこの様な構造になっていたりします。



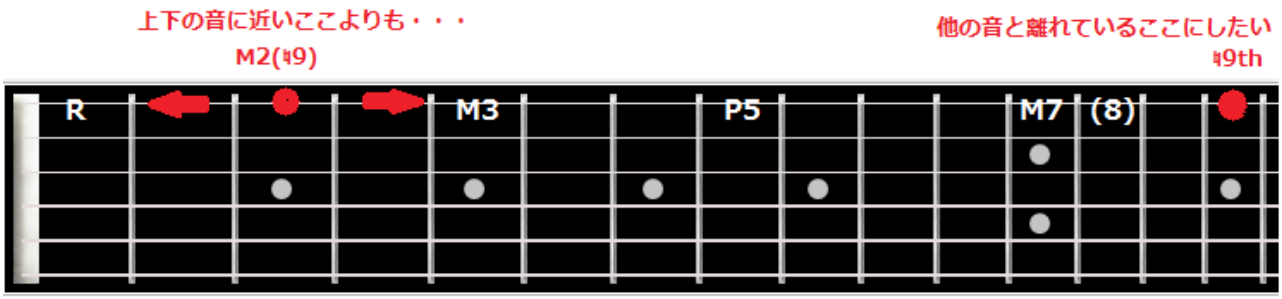

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved 

で、ギターと言う楽器は、「普通にコードを押さえると、(多くの場合は)大なり小なりこういう状態である」と言う事を理解した上で、テンションとする音をどの位置に加えていくのか？を考える必要があります。

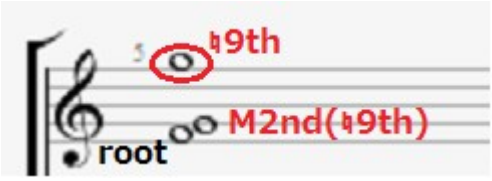
基本的には、音と音の距離が近いほど、同時に鳴らした時に「調和する感じ(≒綺麗に重なる感じ)」が薄れていく傾向にあるので、それなりの距離を保ちたいわけです。

所謂、ダイアトニックコードを構成する時の「3 度積み」と言う基準は、こういう所からも来ています。(※2 度以下で積み重ねるのがダメなわけではありません)

例えば、FM7 などのメジャーコードに 9th を加えたい場合、理想としてはこの様にしたくなるわけです。




※五線譜上での距離のイメージ




もちろん、どれが正解と言うものではなく、内側に目的の音を入れても良いのですが、大元では、この様な観点を基本にヴォイシングを考えていったりします。

さらに言えば、ここまでの話はギター 1 本のみの範囲で考えている事なので、アンサンブルの中では、他の楽器との兼ね合いも必要です。

例えば、ベースプレイヤーがコードのルートを鳴らしている場合、ギターはルート音をあえて弾かないなど、最終的には、その都度、響きで判断していきましょう。

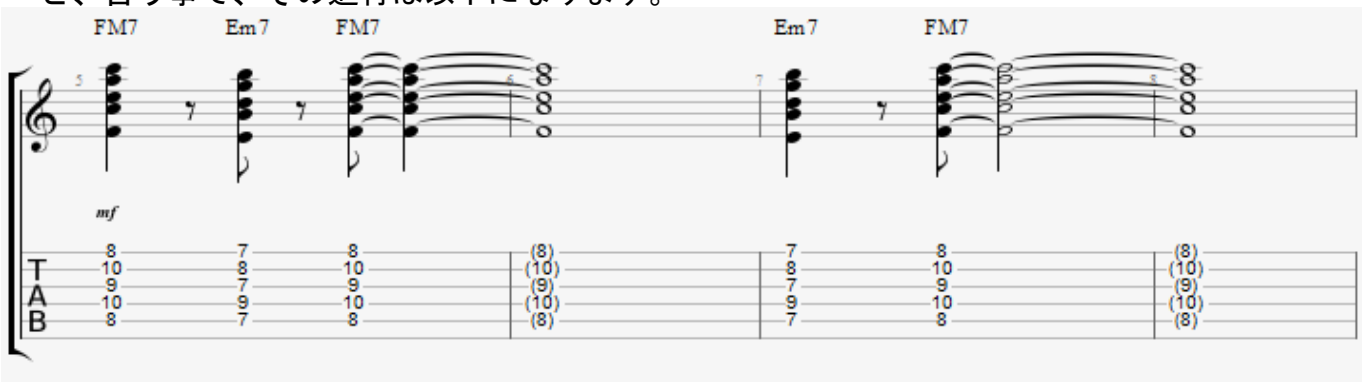
では、コードの話もこの位にして、最後に、リディアンスケールを実際に使う練習をしてみましょう。

各モードには、そのモード感を醸し出す為のコード進行があるのですが、その内のかなり

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

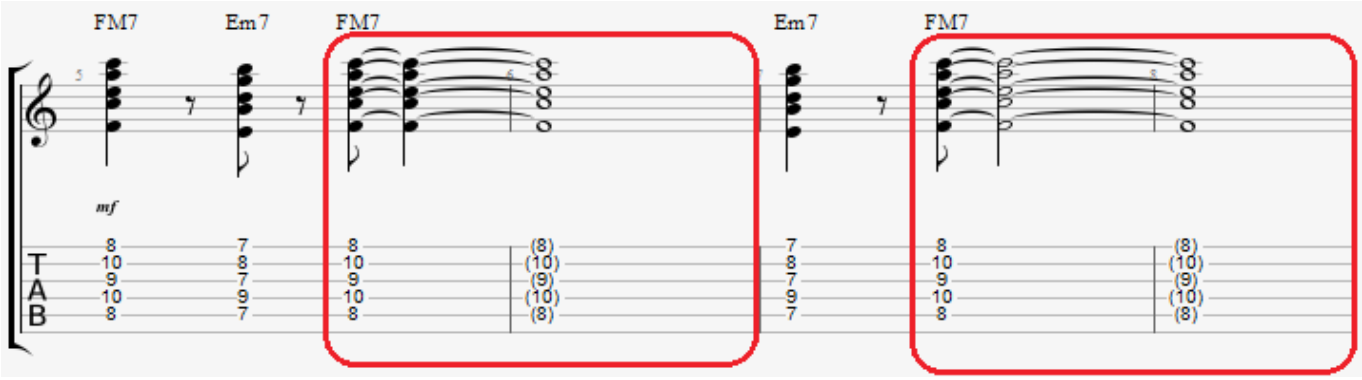
シンプルなバッキングを設定して、その上でスケールを使ってみます。

と、言う事で、その進行は以下になります。




この上で F リディアンスケールを弾いてみましょう。

何かしらのツールでバッキングトラックを作ってみても良いですし、もし、ギター一本でやる場合は、自分でコードを弾いた後、以下の赤枠の所で自由に時間を取って、そこでスケール(メロディ)を弾いても良いですね。




詳しくは次回以降に解説しますが、この進行はリディアンモード的な響きの進行なので、例えば、わざと FM7 の上で F アイオニアンを弾いてみたりすると、P4th の部分に違和感を感じるはずです。

それでは、今回は以上になります。

リディアンの導入の内容なので、以前やった事と被っていることも多いですが、改めて、この音構成が醸し出す響きを良く聴きながら取り組んでみて下さい。

また次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved 